

21. ニセアカシア

科名：マメ科 学名：Robinia pseudoacacia 別名：ハリエンジュ、アカシア、ロビニア

英名：False Acacia, Black Locust

樹高	陽陰	陰	乾	寒	雪	潮	風	公	病	生長	剪定	移植	深さ	広
15～20m	陽	×											浅	大

(1) 樹木特性および特徴

- 札幌のニセアカシア並木は歌にされるほど有名であったが、枝が折れやすい、強風で倒れやすい、虫がつきやすい、枝が暴れるなど苦情が集中する傾向がある。
- 観賞としては花、樹形であり、花は蝶形をした白色で、6月中～下旬開花する。

(2) 環境条件への対応

- 日当たりを好み、耐陰性はあまりない。
- 土質は選ばず、痩せ地・せき悪地にもよく生育するが、低湿地より乾燥地のほうが良い。
- 耐寒性、耐潮性があり大気汚染にも強い、しかし風害には弱い。
- 生長は早いですが、都市環境下では寿命が短く、腐れも入りやすい。
- 根は浅根性で、広がりは大きいですが、移植は容易である。

(3) 発生し易い病虫害

- テッポウムシの被害が主なもので、発生期の見回り点検による早期の処理が肝要である。
- このほか、新梢伸長期に大量に発生するアブラムシ、カイガラムシ、クワカミキリなどで、病気としては、胴枯病、たんそ病などが挙げられる。

(4) 樹木導入の経緯

- 北アメリカ南東部原産の落葉広葉樹。街路樹として導入された歴史は古く、明治8年ウィーンの万国博覧会に出席した津田仙氏(津田塾大学の創始者津田梅氏の父)が、市内に街路樹として使われているこの木の種を持ち帰ったものが最初とされている。
- 札幌では市内発の街路樹として、明治18年(1885年)に駅前通りに植えられたものが初めてとされており、この木は津田氏が寄贈したものであった。

- ・ また、札幌農学校のお雇い外国人として招かれたアメリカ人によって、別のルートから持ち込まれたという説もあるが、いずれにしても百年以上昔から札幌の地に根付いていたことは確かである。
- ・ 市内における街路樹本数のトップの座をナナカマドに譲り(平成 12 年 4 月 1 日現在、1 位ナナカマド、2 位イチョウ、3 位ニセアカシア)、ほかの樹種に植え替えられてきている。

(5) 参考となる主な路線

- ・ 南郷通中央分離帯、宮の森・北 24 条通、白石・藻岩通。

管理の特性

(1) 管理の特性

= 管理全般 =

- ・ 生長が早く、放任すると受風面積が多くなって風倒の被害が発生しやすくなるため、しっかりとした骨格作りと、不要な枝の透かしを行って、樹形をコントロールすることが大切である。
- ・ 強剪定を繰り返すばかりでは、この木の本来の良さである甘い香りの花房を見ることすらできなく、植えている意味がなくなってしまう。このためからもしっかりと骨格作りを行った上で、開花母枝を確保するテクニックが不可欠となってくる。
- ・ 街路樹としての寿命は短いものと考え、老齢木のチェックをしっかりと行って、危険なものは速やかに更新することが必要である。

= 生育初期管理 =

- ・ 植栽の翌年から急速に伸長生長と肥大生長が始まるため、この時期に将来の枝配りをしっかりと誘導することが大切である。
- ・ 将来樹形は逆卵形を目標にし、まんべんなく主枝が分岐するように配慮する。
- ・ 特にかなり下の方で複数の幹が分岐しているものが植えられていることが多く、この場合には早く一本の幹に減らしてやる。
- ・ 肥大生長が早いので、結束直しはこまめに行い、食い込みを防ぐ必要がある。結束箇所には傷を付けると胴枯病を発生しやすくなり、将来幹の折損の原因となる恐れがあるので注意する。

= 生育盛期管理 =

- ・ この木の場合には支柱は撤去せず、生長に合わせて二脚鳥居から三脚鳥居、あわせ鳥居へと強化してゆく必要がある。
- ・ 風倒を受けやすい樹種のため、夏季剪定時のふところ枝の枝透かしは特に大切であり、主枝の枝先のムダ枝の枝すぐりとあわせて重要な作業となる。
- ・ 風倒の原因は浅根性の樹種特性にもよるが、根の生育空間が狭いことによる生育不良、剪定の繰り返しによる生育不良、その結果としての病菌の侵入による根の腐れなどの原因も無視できない。
- ・ 電線類は樹冠中に取り込むが、刺があるので、必要に応じて占有者に防護カバー設置を要請する。
- ・ 木のサイズに合わせた剪定の強さを調節することが大切であり、バランス

の取れない強剪定によって一斉にムダ枝が発生して却って樹形を崩したり、
胴吹きやヒコバエを誘発して通行の障害になる例が多いので注意したい。

- ・ 冬季剪定の際には、翌年の開花母枝になる当年枝をバランスよく四方に残すことに注意したい。この枝にできるだけ勢力を振り向けることにより、徒長枝の余分な発生を抑制し、樹勢のコントロールを図る。

= 老齡期管理 =

- ・ 強剪定を繰り返してきた木では、切り口から胴枯菌が侵入し、枝の内部まで空洞化していることが多い。これらは不意の枝折れなどにより、剪定作業にも危険を及ぼすことがあるので、作業中にも点検を行っておくことが大切である。
- ・ 老木の幹折れや枝折れの被害はかなり発生していることから、日頃からの点検によって未然に防ぐほか、思い切った更新も検討する。

(2) 目標とする将来像(樹形など)

- ・ 当初から目標樹高を定めておく。
- ・ 自然樹形：植樹帯や環境緑地帯などで、かなり大きく(20m程度)なると自然に樹形は落ち着いてくるが、街路樹では自然樹形に留めることは不可能である。
- ・ 剪定樹形：直幹型-卵円形、頂部優性のため逆卵形となりやすい。



ニセアカシアの剪定樹形



強剪定を行ったため
発生したと考えられる胴ぶき